

～子宮がんで命を落とさないために～

HPV 検査併用子宮がん検診と子宮頸がん予防ワクチン接種をお勧めします

元県対がん協会細胞診センター所長

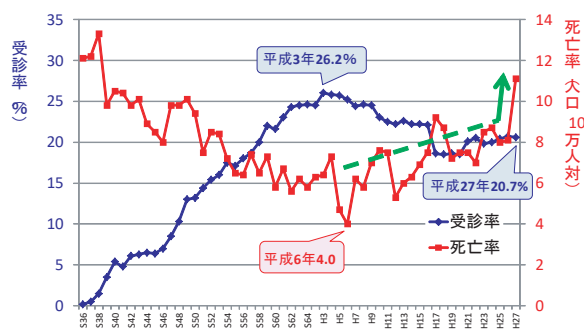
仙台市立病院名誉院長

東岩井 久 先生

去る9月2～3日の二日間、仙台国際センターで「婦人科がん検診を鳥瞰（ちょうかん）する」（※鳥瞰：全体を大きく見渡す）というテーマで第26回日本婦人科がん検診学会が開催された。婦人科がん検診の今後の可能性と限界について討論され、非常に有益な学会であった。子宮がん検診の先進国であるイギリスやオーストラリアでは、検診の最初の篩別（しべつ：ふるい分け）にHPV検査が使用されており、対象人口の80%以上が検診を受けている現状や子宮がん検診の精度を上げるためには、細胞診とHPV検査の併用が有効であることが明らかにされた。この併用検診では、特異度（がんでない人をがんでないと診断できる率）は多少落ちるものの、感度（がんの人をがんと診断する率）は高いことが報告された。また、子宮頸がん予防ワクチン（HPVワクチン）の接種を受けた人が、前がん病変の異形成や進行癌になる率が非接種者と比べて極めて低いことも報告された。

これらの報告を聞きながら、宮城県が子宮がん検診の先進県と呼ばれてきた現在までの流れを顧みて、感慨深いものがあった。全国に先駆けて、昭和37年1月に子宮がんの集団検診が開始された。39年6月農協婦人部の「米一升運動」の賜物で全国初の婦人科検診車「第一みずほ号」が誕生（43年には宮城県より検診車「幸せ号」が貸与され検診車増加）し、3年後には、現在広く行われている医療機関による子宮がん検診方式が開始され、車検診と施設検診による宮城県のがん検診2輪体制が整った。平成28年からは、従来の「直接塗抹法（不適正検体が多いとされる）」から、HPV検査にも応用できる「液状化検体細胞診」が導入され、検診体制や精度管理がいつそう進化してきた。

子宮頸がん検診受診率と死亡率の
年次推移（宮城県）



宮城県対がん協会資料より作成

「受診率と死亡率の年次推移」を見ると、昭和30年代、人口10万対13を超えていた宮城県の子宮がん死亡率が、検診受診率が上がるにつれ、徐々に低下し平成6年4.0まで低下した。しかし、受診率は平成3年26.2%をピークに低下に転じ、平成27年には20.7%となった。一方で、死亡率は再び増加に転じ、平成27年には11.1と急上昇した。

日本の子宮頸がん検診の問題点を考えると、先進国では子宮がん検診の受診率は80%を超えているのに、検診の先進県と言われた宮城県でも40%程度にとどまっており（厚労省の統計に入らないすべての子宮がん検診を含む）、受診率の向上が喫緊の課題となっている。加えて、いったん開始されたHPVワクチンの導入が中止の状態になっていることも憂慮すべき問題である。

きょくりニュースを読まれた方へお願いしたいことは、HPVと細胞診の併用検診を受けていただきたい。さらに、若い女性とくにセックスを開始していない女性には、HPVワクチンの接種をお勧めします。

第 36 回日本思春期学会に参加して

～今、この時代を生きる若者たちが抱える問題とは～

看護師主任 早坂 恵

8月26～27日に宮崎県で行われた、日本思春期学会に参加しました。今回のテーマは、「いのちのバトンを繋ぐ ～いのちが生み出すもの、変えるもの～」でした。クリニックからは、17歳で性感染症にかかり、以来関わってきたケースについて私が報告しました。



印象に残ったのは、特別講演「若者たちの性に何が起きているのか～セックス嫌いな若者たち～」(日本家族計画協会 北村邦夫氏)です。日本家族計画協会が2年毎に実施している「男女の生活と意識に関する調査」によると、18～34歳の未婚男性では42%、女性では46%に性交経験がなく、8割以上が「いずれは結婚したい」と回答するものの、30～34歳男性の15.2%、女性の19.4%が「結婚するつもりはない」と回答しました。「結婚の利点」については、男女間の回答の違いが顕著で、「経済的に余裕がもてる」が女性では高く、「性的な充足が得られる」が男性では高くなっており、70%を超える男女が、「子どもを持つにあたり不安に思っていること」として、「経済的なこと」を第一に挙げているという結果でした。分析結果から、若者たちの性に起きていること…それは“草食男子が増えた”などということだけではなく、背景には経済的なことが関係しているという現実を改めて知り、重い課題だと感じました。

「性の健康と生命危機への支援」というワークショップでは、子どもの自殺について触れていました。厚生労働省の2016年の発表によると、15～19歳での死因の1位は自殺、10～14歳では自殺は死因の2位でした。自殺の原因は「学業不振」などの学校問題が36.3%、次に「親子関係の不和」などの家庭問題で23.4%、続いて「うつ病」等の健康問題で19.7%、「いじめ」が原因とされるのは6件で全体の1.9%。いじめに関しては表には出て来ない場合も多いので、実際にはもう少し高い可能性があります。思っていたよりも低い割合だと感じました。このことから、いじめの解決だけでは自殺を減らすことは出来ないことが分かります。今、この時代を生きる子ども達が抱えている様々な問題に目を向けながら、彼らが心身ともに健康にいのちを繋いでゆくために、日々の関わりの中でサポートできたらと、学会に参加し改めて感じました。

新スタッフ紹介

看護師 畑山 早苗



今年6月より、看護師としてスタッフの一員に加わりました。
婦人科の分野は初めてですが、女性の心と体の悩みに寄り添えるような存在になりたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。

臨時休診

10月14日(土)は、
「第18回性科学 セミナー／
第37回日本性科学会学術
集会」参加のため休診となり
ますのでご了承ください。

編集後記

ひんやりとした秋の風が心地よい季節ですね。今年は夏がないまま秋に突入してしまいましたが、
せめてこの爽やかな季節は長く続いて欲しいものです ☺
2ヶ月毎に発行していた「きよくりNEWS」は、今月から3ヶ月毎に変わりました。

発行元：村口きよ女性クリニック
http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp
e-mail:con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

